
勘違いされる如月くん

W . A

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

勘違いされる如月くん

【Nコード】

N84680

【作者名】

W・A

【あらすじ】

如月晃は勘違いされながらも前に進んでいきます

更新は現在1週間に1回のペースです

第1話

朝のプラットホーム。

たくさんの人で混雑しているなか如月^{キサラギ} 晃^{コウ}は某高校へと通う。

彼のまわりからの評価は暗い、話しづらいと言った評価が多いが実は彼はとても奥手で彼の中身は明るいのだ。

そんな彼は今日もいつもと同じように学校へと向かう。

.....

pipipi...

電話がなるなか一人の男が電話をとる。

「あん、こいつがターゲットか？しかしなんでわざわざ朝のラッシュの時にやるのか！？普通ならもっと目立たない時からやるのではないのか。」

「いや、その騒ぎに上じて北から逃げてくれ」

「ふうん、まあ俺らはクライアントから任されているだけだからまだいいが…浅田さんもかわいそうに…」

彼が持っていたファイルには浅田一郎と書かれていた。

そして彼は銃を手にとり部屋を去った。

・・・・・・・・・・・・・・・・

浅田 一郎は都内有名セキユリテイ会社「セーフティー」の幹部であり、同じ幹部の川田 洋一が不正をしたことを知って命を狙われていたのだ。

それを知らず駅を歩く浅田

「やっと、証拠がそろったか。これで川田を捕まえられる。なあ山田」

「はい、旦那様。この後午前10時より刑事の田中氏がやって参ります」

山田と呼ばれた男、彼は浅田家に仕える執事で銀髪オールバックの初老だ。

と、そんな会話をしていた時、「パンツ」とした音がするといきなり浅田の横にあった看板に丸い穴が開いた。

「旦那様、こちらへ」

山田の顔は驚きに満ちて、これが浅田を狙ったものだとすぐに分かったが浅田はきょとんとしながら立ちすくんでいたのだ。

慌てて山田は浅田のことを物影へと連れて行こうとした。

その時思ったのは一体あの少年は何物なのだろうか？といった疑問

だった。

彼は少年が何かをして浅田のことを助けたのを見たのだった。

その少年の動作はとても熟練されたものであり、昔、軍にいた山田でさえその動きは完璧には掴めなかったのだから。

彼の背中から冷や汗がにじみでているが彼は自分の使命、浅田を守ることを思い出し慌てて行動を起こしたのだった。

.....

（何者だ？）彼の顔は驚愕に満ちていた。

仮にも彼は裏の世界で銃のスペシャリストとしても知られていて「流星のカイト」と呼ばれていた。

そんな彼でもこんな敵は初めてだったのだ。

「こちらカイト。ターゲットを発見した。狙撃するぜ」

「きちんとぶちぬいてくれ」

そう言われながら彼は銃を構える。

（あいつの頭は貫った）

そう思い引き金をひく。いつもはこれで終わる。

しかし今回ばかりは違った。

急にターゲットの近くにいた少年。彼の気配は一般人のそれだったのだから……

彼が不意にあげたかばん。何かにあいさつするようにあげたその角に銃弾が当たりターゲットに当たらなかった。

彼は偶然だと思いもう一発撃とうとしたらスコープ越しに目があった。

そして彼の口はこう言っていたのだ

「俺の前ではやめてくれ」

恐ろしかった。何十年と裏の世界にいた彼もそれには恐怖しか浮かばなかった。

しばらく呆然とする間にターゲットは跳弾でも届かない影に隠れてしまった。

そして不気味な少年は隙だらけな恰好で、しかし撃つことができないままさって行ったのだった。

第2話

「はあ」

一人ため息をつきながら朝学校に向かう少年。

彼の名前は如月 晃。彼の朝が始まった。

「今日確か英語の小テストがあるんだよな」

教科書をめくりながらそんなことを考える。

ジリリリ〜
♪

電車のベルが鳴り無理矢理押し込まれた。

（はあ、今回も不合格かな）

朝のラッシュでぎゅうぎゅうと押し込まれたため彼は諦めてバック
な中に教科書をしまう。

彼の通う学校。大鳥学校はごくごく一般の学校だ。

そこでは普通にテストをして、テストでクラスが決まるといったバ
リバリの進学校でもないのだ。

「しかし、この駅は便利だなあ」

「おおい、晃」

そう言ってきたのは俺の相棒の岩切イワギリ 猛タケルだ。

俺もその挨拶に返事をしようと思い手を上げた。

上げた…と思ったら靴紐がとれていることに気付き体制を下に崩した。

するといきなり鞆に強い衝撃がはしり、体が左に傾いたのだ。

流石に相棒にこんなマヌケなところを見せられないので相棒に向かって

「俺の目の前では（ネタには）させないぜ」と言った。

相棒はそれを見ながら流石だなと言って笑いかけてきた。

俺もそれにたいして小さく笑いかけた。

最近たったことを伺えるピカピカした床、近未来的な構造の駅は利便性も他の駅にくらべとても使いやすい。

そんなことを思いながら出口へと向かう。

.....

岩切 猛は思う

晃はやはりすごい。

俺が敵に気がついたのは晃を見て晃がしきりに俺のほうに視線を送ってきたからだ。

晃は敵のことをずっと前から知っていたのだろう。

そしてあえて視線を送ってきたのはきっと相手に俺の存在を知らせないためだろう。

俺は日本政府防衛特殊捜査機関特殊第四部隊に所属している。

晃は俺がそこに所属しているのを教えていないがきっと彼は気付いているのだろう。

彼はやさしい人間なのだ。

いつもそうだった。あいつの回りには頻繁に裏でも名が知られているものがよくいるが全て不殺で回りに被害を出さずに終わらせている。

たまたま俺がある人物について調べていたら彼のことを偶然知ることができた。

同時に怖かった。

あんな実力者がこんな近くにいるなんて。

だから俺は聞いたんだ。

夏の暑い日、一緒に掃除当番になり彼が箒をわけがわからないほど回していた。いや、彼には全てわけがあり計算されていたのだろう。

「何をしたいんだ？」

「虫をはらって快適な日になればね…」

その言葉で俺は回りに敵がいることに気がついたのだ。

そして彼は穏やかに過ごしたいってことも分かった。

それは素晴らしく尊いもの。

力あるものは穏やか、平和には生きられないのだから。

だから俺は彼の相棒でいたい。

第3話

あの事件の次の日

山田は例の少年のことを調べていた。

そしてわかった事はただひとつ。

彼は一般人だという情報のみ。普通の人はそので納得するが山田はそうは思わなかった。

それはとてもおかしくないのだ。

なぜなら「裏」に住む人は皆、情報秘匿を確実にしている。それは山田、カイトもそうだ。

彼らは名前こそ知られているが過去に何があったかまではわからないのだ。

だからこそ山田は思う。

（彼ほどの腕を持つなら必ず名前ぐらい聞いたことがあるはず。しかし彼のことは如月 晃という名前…偽名のみか）

山田は「裏」で如月 晃の名を聞いたことがなくあんなすばらしい実力者の名前が知られていないのはおかしいということで偽名と判断したのだ。

またあんな実力者なのだから情報秘匿も一流という風に思ったので

ある。

残念ながらそれはとてつもない勘違いなのだが…

もう一人、彼に邪魔をされターゲットを殺害できなかったカイト

彼もまた同じように情報を探していたのだ。

pipipi…

…という訳なんだがそいつの情報はいいのか？」

「それが私を持ってしても無理なのだが本当にそんなやつなのか？勘違いじゃないのか？」

「いや、そんなことはない。あいつは間違いなくマスタークラス（達人）だ」

「そんなら私の情報網に引っかかるはずだが…」

「ふん、じゃあ相手は「裏」でもトップクラスということか。恐ろしいな」

彼女は「裏」においても名をいられている情報屋で「東の魔女」として知られている。

武力も実力さることながら情報を巧みに操り相手をおとし入れる手

腕は魔女のごとく…

しかしそれでさえあの少年についてわからないということは、それはトップシークレットと言えるだろう。

「ふざけんじゃないよ。私がそのいつのことをきっちり調べてやるよ。」

カイトはくすみ笑いを隠せない状態で「おお、それは頼もしいなあ」という。

どうせ無理だと彼は思ってるようだ。

さて話はまた「東の魔女」へ…

まず最初に彼女特製カスタマイズパソコンを用いて日本国家総資料部へとクラッキングをかける。

彼女ほどの腕になるとわずか120秒ですべての如月 晃に関する情報を…もちろん彼女とてこれがすべて本物でないと確信している。

いわばこれは肩慣らし。この後、さらに大量の機密がある日本国家情報部暗部組織に接続する。

「やっぱここは何度来てもスリル満点だね。まあそのほうがやりがいがあるんだけどね」

そんなことを言いながらも彼女の手は止まらない。

そしてすべてを探し終えて「ちっ、やっぱないか。そうするとその

情報はlevel5クラスか…」

情報クラスlevel5

それは日本最重要機密で「東の魔女」でも調べることは不可能に近い。

「こんなものに命はかけられないな。割に合わない」

溜息をつきながら彼女は調べことを止めたのだ。

第4話

p i p p i...

「やっぱり無理か。まあ期待していなかったんだけどね」

「ああ、悔しいが命は惜しいんでね。こつから先は私でも無理だ。ただ一つ忠告するならあんたこれ以上あいつに手を出さないほうがいいよ」

「わかってるさ」

「.....まあそういうことにしておいてやるよ。忠告はしたからな」

そうしてカイトは電話を切った。

そして彼はつぶやいた

「まあわかってるんだがな。やっぱり仕掛けるか」

彼のプライドが一瞬で崩れたあの出来事は彼の心に絶大な影響を与えていたのだ。

もともと彼は頭で考えるより行動するほうが得意なのでこついうことになるのは当然のことなのだ。

.....

如月 晃は放課後に相棒の岩切 猛とともにのんびり商店街を歩い

ていた。

日が傾いていてきて買い物に来た客が増えたので自然と彼らの足は人が通りでも少ない路地の近くまで来ていた。

岩切 猛はその路地にきな臭い何かを感じとった。

「なあ晃、この空気ってなんだろうな」

「ゴミだな」

薄く笑う彼だが目は全く笑っていない。

猛はこのままだと彼がゴミ掃除：生きる価値ないやつらを殺してしまふことを悟った。そんなことのために彼の手を煩わせたくない猛は自分で処理することを決めた。

「ちょっとゴミ掃除に行ってくるよ」

「いや、俺が行くぜ。こういうのはほっとけなくてな」

「お前は疲れているだろ。だから俺にまかせろ。なあ相棒」

少し彼は考えて「…わかった。お前に任せる。俺は先にあそこの公園に行ってるぜ」

「了解」

.....

足は自然と路地裏へと向う。このあたりはポイ捨てが多く少し臭い。

晃は今日も疲れたなあと感慨に浸っていると

「なあ晃、この空気ってなんだろうな」

と、当然のこと（ゴミの臭さ）を言ってきたので

「ゴミだな」と返す。こういうことは前からよくあったので彼はとくに気にしない。

そんなことを言いながらも内心では臭いのにしゃべらすなよと愚痴を言っていたりする。

それを察したのか猛は

「ちょっとゴミ掃除に行ってくるよ」

（いや、そんな気のきいたことしなくていいし、ってか俺が無理にさせた見たいじゃん）

流石に一人でやらせる訳にはいかないので

「いや、俺が行くぜ。こういうのはほっとけなくてな」

「お前は疲れているだろ。だから俺にまかせろ。なあ相棒」

彼が妙なところで気をきかせるのは多々あり、ここまで来ると止められないのも事実、よって彼は近くの公園で待ち合わせることに決めた。

（まあ猛もこういのが嫌だったんだろうな。前からゴミという言葉によく反応してたし。今度何か消臭剤みたいなものを買って行ってやるか）

なんて馬鹿げたことを考えてもいた。

第5話

猛といったん別れ公園に向かう晃

そして公園に着いてのんびりと歩きながら、そういえば猛の掃除つていつ終わるんだ？と考えているとふと足元に何かが当たった感じがして下を見ると透明なビー玉が1個落ちていた。

（へえ、これって俺がよく飲んでいたラムネのビー玉じゃないか。もらっておくか）

実はビー玉とか変なものを集めるのが彼のひそかな趣味なのである。

そんなことを思いながらまた歩いていると”ブチっ”と嫌な音がした。

（また靴紐かよ。一体何回目なんだか）

そう言いながら腰を下げて予備の靴紐（なぜかいつも常備しておく）を直した彼。

そして立ちあがろうとしたら足が吊ってしまった。

（やばっ）

慌てて体制を立て直す。

一段落してポケットの中に手をつ込むとビー玉が無くなっているのに気がついた。

（あれっ、どこいったんだ？）

「おおい、昇。こっちは片付いたぞ」

猛はそう言いながらこっちに向かって来る。

（まあいいか）

そしてこっちも手をあげて返事を返す。

・・・・・・・・・・・・・・・・

さて、あいつの隣にいたやつは川田の協力をかりて引き離すことに成功した。

約20人程であるからあのレベルを足止めするにはせいぜい10分がいいところだろう。お世辞にも足止め役は強いとはいえないからな。

そうするとあとは俺の方だが…

正直言うと全くしとめられる自身がない。時間も少なく、最もあいつではどんなに時間をかけようとも無駄であるだろうから一瞬にすべてをかける。

俺は「流星のカイト」としてやらねばならぬのだ！

あの公園は俺の最高の狙撃場所だ。さすがに1キロ離れた所からの不意をういた狙撃は防ぎきるのは不可能だろう。

もちろん俺が当てないと意味はないのだが…しかしたった1分しかれど1分ここにすべてをつぎ込む。

そしてチャンスが来た。あいつは靴紐を座って結び直す。そして立ち上がるうとした。

（もらった！！）

最高の場所からの狙撃、俺が今までで一番集中し、そして今まで打ち続けた中で最高の出来であるといえた。

あいつの完璧な死角からの跳弾による狙撃。絶対に当たる…はずだった。

あいつは絶妙なタイミングで前に体を傾けた。

本来、人はある動作をしている間に別の動作にすぐに移るのはとても難しく。

それは今回の場合、立ち上がる晃のその瞬間。それを狙った狙撃は本来かわすことすら不可能だっただろう。

それを傾げるだけでよけるなんて恐怖以外の何物でもない。

しかもあいつは跳弾をかわすだけでなくこちらにポケットに入っていたビー玉を投げたのだ。

跳弾により狙撃ポイントをつかめなくさせていたのに一瞬でバレてしまったのだ。

さらに前に傾きながらポケットを鞘にしながらビー玉を投げる…はたして投げるといつていいのか。鞘としたポケットから打ち出された球は居合の原理を用いてかなりの速さでやってきた。

もちろんかなりといつてもよければものだったがそのビー玉が厄介なことに透明で気づくのが遅れ、ぎりぎりで避けたがライフルスコープを割ってしまったのだ。

たったあれだけの時間でここまでの反応ということからあいつが一体どれだけ戦いに身を投じていたかわかる。

もはやこれまで、と思ったがあいつは相棒に事のしだいも話さず去ってしまった。

それは暗に「お前は負けだ。いつでもかかってきてもひねりつぶせる。だからもう向かってくるな。俺は無駄な争いは避けたい」と言ったメッセージであると簡単に推測できた。

それは俺に戦う気力すら失わせたのだ。

第6話

p i p i p i...

「カイト、次の仕事だが「いや、もう俺は降りる」…なんだって」

イラついた声で話す相手…川田に俺は仕事をやめる話をした。

「一体どういうことだ？」

「負けたんだよ、完膚なきまでにな…」

「ふざけるな！一体どれだけお前に金をかけて「もう無理だ。じゃあな」

一方的に切る俺は悪いかもしれないが、あいつに負けた今、もうこの仕事はできない。

「くそつ、なぜだ！なぜ俺はこんなにうまくいかないんだ」

最初の浅田を殺すことを失敗した今、俺が失脚するのも時間の問題だ…そんなのふざけるなだ。

こうなったら…アレしかないか。くっくくくつ、あッハハハハ…

.....

「山田、この前の私が暗殺されそうになった事件だから…調べてくれ

たか？」

「はい、やはりあの事件の首謀者は川田でした。そして実行犯はあの流星のカイトとされてます」

「何、あの流星のカイトだと！それなら山田にも気をとられずに私を暗殺することも可能だろう」

「申し訳ありません」

そう言う山田の顔は普通の人が見たらわからないだろうが何年もとにいる私にはものすごい後悔の念が見えた。

「しかし、そうなると私を助けた少年は……」

「はい、当然、裏のものでしょうか、それもかなりの強さでしょう。身元も調べましたが全然わかりませんでしたし……」

「だったらあつて見るのもひとつの手かな……そういえば刑事が私のもとへ来るんだよね」

「はい、予定では30分後ですね」

「わかった」

「どうも、浅田さん。まあ刑事をやっています田中です。以後よろしく」

そうして私のもとに来たのは、刑事とっていいのか…大体四十台後半に見え、第一印象としてお気楽さがうかがえるにこやかな顔、丸みを帯びた体で人あたりがよさそうだ。そのせいで決してバリバリ刑事として見えないのだが。

「では本題と入りますが…」

そういつたときからの彼の表情が真剣なものへと変わると同時に彼の周りの空気もそれに応じて全く別の空気となったのだ。

前言撤回。こいつはとんだくわせものだ。

「例の少年ですが…普通の一般人ですね」

「なんだって。そんな馬鹿な。私は見たのだぞ、彼の力の片鱗を。それを…」
「落ち着いてください」

私はいつのまにかに冷静さを失っていたようだ。

「コホン、すいません」

「まあいいです。それで彼にあなたは接触しようというのですか。一体なぜですか？あなたは助かったしそれなのに彼に会うのはあなたの立場からしてもたいへんだとおもうのですが」

「まあ第一に私の恩人ですからな。一度はあっておきたいではないですか。それと今後についていろいろとあるので前もって接触して

おきたいですからね」

「いろいろとですか…わかりました。実は私たちも興味があります。あなたの安全のためにも腕利きの人を二人連れてってください」

（これがあいての本音かあ、しかし断りたいが私も立場ある人間である以上断れないか…）

「わかりました。ではこの日程で…」

そうして彼の裏ではさまざまな思惑がからみあっていくのであった。

第7話

田中と浅田、山田はお互いに話を詰め合わせた後、結局後日彼らに直接会うことに決めた。

「では私は大鳥学校の学園長に話を通します。そのときにあなたは彼に護衛任務を依頼したい、ということですがそれでよろしいですか」

「ええ、それでお願いします」

護衛任務：実は浅田はセーフティー主催のパーティーに参加しなければならぬのだ。

もちろんそれには川田も出席するので何かしらのアクションがある
と見ている。

川田を捕まえるための準備がまだ出来ていないので先に川田を捕まえることは不可能なのだ。

だから浅田達は川田を見張る、さらなる証拠を掴むためパーティーに出席するのだ。

しかしそれには当然リスクもある。

よって、あのカイトでさえ恐怖を覚えた如月 晃という人物に護衛をたのもうと浅田は言ったのだ。

もちろん山田はそれは危ない、止めるべきと強く説得する。

結局、一回如月という人物に会って信用がおけるのかを見てみようということになったのだ。

・・・・・・・・・・・・・・・・

朝のホームルームが終わり、のんびりと一時間目の準備をしていると担任からあとで応接室に来いといわれた如月 晃です。

ちょっと待て待て…俺って何か怒られるようなことをしたっけ？

というわけでやってきた応接室

なにやら見知らぬ人がいるんですけど…誰だ？

「こんにちは、君が如月君かな？」

「はあそうですけど」

「私は浅田っていうんだけど少し君に頼みたいことがあるんだけど…ちなみにこっちは山田というものだ」

「山田です」

（ちょー怪しいだろ、ってかグラサンにスーツってどこかのやくざですかっ。しかも山田っていう部下までいるし…何か嫌な直感が…こっいつときはなんか話題をそらさなくてはっ…）

「そっいえば今日は虫が多いですね。とくにあそこ（机の上の花瓶

に湧き出る虫)には…」

(ってちょっと待て…俺何言ってるんだ。ついつい虫の話しちゃったけどそんな話誰も聞きたくないだろ…やっぱり浅田さんも嫌そうな顔してるし…)

「いやいや私が頼みたいのは…その…裏のほうなんで…」

そう申し訳なさそうに話す。

「裏(虫の駆除のような裏仕事)ですか…いやあ…その僕も学生ですし…一体なぜ僕にそれを頼むんですか。もっと専門(虫駆除屋)がいるでしょ」

(確かに俺は虫を倒すのは不得意ってわけではないが専門の人のほうがいいだろ)

「学生ですか…確かに今はそうですね。しかし私はあなたの後の力量をみこんで話をきいてください」

(ってかなんでそんなことを俺に…ここはありえない条件をつけて断ろう)

「わかりました。では僕の(学生という)立場があるんで条件として(虫駆除する人と問題を起こさないように)不干渉でお願いします」

(さすがに学生を雇って不干渉はないだろ)

「……わかりました」

（えっ、なんすかこれ。まさかのアルバイト決定？）

「ではこれで、後日迎えのものがこちらへくるので話しはそのとき
にお願いします」

山田はそう言って、浅田とともに一礼して去っていったのだ。

第8話

「こんにちは、君が如月君かな？」

さてやっと話を詰めて、私と山田が彼に会うことをきめた。

「はあそうですけど」

「私は浅田っていうんだけど少し君に頼みたいことがあるんだけど…ちなみにこっちは山田というものだ」

「山田です」

「そういえば今日は虫が多いですね。とくにあそこには…」

何っ、もうばれたのか。あそこには田中氏と私の護衛の三人が隠れていることに…

これは早めに交渉をしたほうがいいか…おっと、ついつい表情を陰しくしてしまったか。彼もそれに気づき何やら考え込んでるらしい。なんていう洞察力なんだ…

「いやいや私が頼みたいのは…その…裏のほうなんで…」

これで彼は気づいたはずだ…

「裏ですか…いやあ、その僕も学生ですし…一体なぜ僕にそれを頼むんですか。もっと専門がいるでしょ」

今の状態は学生とこの部屋には関係者しかないのにその注意深さには感心するしかない。確かに私の言葉は軽率だったな。

以後気をつけなければ…彼は学生のふりをしているんだからな

「学生ですか…確かに今はそうですね。しかし私はあなたの後の力量をみこんで話をつけさせてください

ここまでの人材を逃すわけにはいかない。たとえ情報クラス1e v e 15というリスクをおかしてでも価値はある。

「わかりました。では僕の立場があるんで条件として不干渉でお願いします」

条件…この言葉で部屋の空気が冷え込む…と思われていた。しかしその条件が不干渉というのにはあまりにも相手の利益がないと思うが一体どういうことだ？

しかも僕の立場といってることから彼自身はとても心優しいのだろう……だが…

そうすると私たちが如月 晃がどういう人物が探っていることもばれていながら…こんなやさしい条件を出すのか？

あまりにも謎で一体何がしたいのか…何かかくしているのか？それとも……

いやいや、私たちが頼んだのだからそんなことを探るのは無理か…

どちらにしろこの条件はのまないといけなだろう。

「……わかりました」

さて、なんとか切り札を手に入れることができたがこれが吉とでるか凶とでるか…

まあどちらにしろこれしか方法はないからな…

しかし最低限の警戒をしなくてはならないか。

「ではこれで、後日迎えのものがこちらへくるので話しはそのときをお願いします」

まあ彼を味方につけたと思うしかないな。もしかしたら川田のことを探ろうとしているのかもな。

第9話

舞台はかわりここはグランドキングホテル…日本屈指の最高級ホテルだ。

白を貴重とした壁に黒をアクセントとしてとても落ち着いたデザインに仕上がっている。

内部も華やか過ぎず、かと言って質素な感じではなく上品な安らぎの空間を作り出すこのホテルはやはり最高級といえるものだ。

そんなところにとても場違いな少年…如月晃はいた。

「こちらでございます」

そう言つて案内されるのはそのホテル最大であるロイヤルホールに通されてしまい思わず啞然としてしまう。

美しい白い龍をモチーフにしているそのホールは雄大であり目を見張るものがある。

「どうかされましたか。如月様」

「ああ、あの龍に驚かされたただだよ」

そついうと近くにいた黒服の人があわてて何かを従業員らしき人に指示をしている。

大変だなあとのんきに見ているとおいしそうな料理を見つけた。

テーブルにはローストチキンやステーキがきれいに並べられていて脇にはたくさんの種類のサラダがある。

それらは自分の素人目からみてもすばらしいものだ。

庶民の自分には驚くことが多いこのホテルであつたがこんなおいしいものを見ると食べたくなってしまうのが俺というもの。

今ここで俺のひとつのスキルである「天才つまみ食い師」を発動！！

テーブルの近くにいる従業員の死角を突き相手に悟らせないようにするよう移動

しかし…

「如月様」と声が聞こえた

……ミッション失敗だと！

まさかの事態にあわててしまい、しかもここは俺の存在は場違いである。

つまり…追い出される！

あまりの事実近くにあつた水をこぼしてしまった。

ここはやはりスルースキルを発動させてやりすごすしかないか

ここで俺は相手が山田さんだということに気がついた。ここはあれで逃れるしかないか

「ははは…山田さんではないですか。おっと、そういえば私は雑用のアルバイトですよ…こんなところにてはすばらしいパーティーが台無しになってしまいますね。では私は皿洗いにいきますよ」

「……わかりました」

山田さんの顔は険しいものになっていた。

危ないところだった。さすがにつまみ食いと水をこぼしたのはまずかったか。

山田さんもこの顔を見る限り怒っているなあ。

さっさとここは退散して裏方の仕事をやりにいけますか

それにしてもお腹へったなあ。はあ…

第10話

グランドキングホテルというのは確かに最高級のホテルであるが実はこのホテルはそれだけでなくセキュリティ面でも最高のものとされている。

「セーフティー」の技術力を駆使して作ったこのホテルはそう簡単には落ちない。

ただ問題があるとするならばそれは川田が管轄だったということだ。どんなものにも必ずセキュリティホールが存在する。

川田は管轄だったため余計にそのことを知っているはずである。

よって山田は細心の注意を払っていたつもりだった。そう…つもり…だったのである。

まさか龍の装飾に爆弾があるかなんて気がつきもしなかった。

これもあの如月 晃がいたからだ。

彼は初見であの龍に違和感を感じたのだろう。

彼もこのホテルを何度も使うことがあったのだろう。考えてみれば彼も何かしら裏にかかわることが多くきつとこのホテルを使ったことがあるのだろう。

さすがとしか言いようがない。

私では気がつかなくてできないことを平然とやってのける彼の力量には驚かされっぱなしだ。

これだけではなくなんと旦那様が食べるものにも毒が仕掛けられていたなんて…

きちんと確認したにもかかわらず毒が入っていたのはきつとロイヤルホールに並べられたときにやられたに違いない。

しかしまたも如月 晃のおかげで助けられた。

彼は気配を回りに溶け込ませ一瞬で料理に近ずいたのだ。

あまりにもすばやくあつという間のことでついつい呆けていたのでついつい声をかけてしまった。

すると彼はあわてて水をこぼしたのだった。

そして「ははは…山田さんではないですか。おっと、そういえば私は雑用のアルバイトですよ…こんなところにてはすばらしいパーティーが台無しになってしまいますね。では私は皿洗いにいきますよ」と彼が言ったところで私は気づいたのだ。

彼が誰かに監視されていることを…たぶん川田の仲間がこの場違いな少年に目をつけたのだろう。しかし彼は自分が雑用であるともっともらしいことを言うと言った彼にかけられていた視線がはずされた。

なんてすごい知略なのか…言うことに無駄が全くないとは

同時に彼がこぼした水は何かが入っていたのではないか…と疑念にかられた。

彼は無駄を起こさない。ならばこの行為自体にも何かしらの理由があるのでは？

回りにいたものをすぐに呼び片付けとともにその水の成分を調べさせた結果やはり毒物が検出されたのだ。

やはりそうだったのか。

これを受け、私は警備にさらに力を入れるしかなかったのだ。

第11話

何だ？何なんだ、なぜ浅田のやろうを殺せない…なぜ事前に仕掛けていた罠が作動しない！なぜあいつの料理に入れた毒が抜かれてるのか！わからない……ありえない……はっはははは…

もうおしまい…いや…あきらめてなるものか

こうなったらあいつを…あいつらごと……そうだ、みんなみんな吹き飛ばす！

このボタンを押せば全てが…全部皆殺しだ！

はっははははは…

…

「しかし、一体どうしたものか…」

如月 晃はなんとかごまかしながらロイヤルホールをでたが肝心の仕事内容を聞いていない。

よって彼は何をしたらよいのかわからないのだ。

ついホールから出る口実に皿洗いを口に出したが、どこでそれをす

ればいいかもわからず、何もすることなくホテルをうつろついたのであった。

pipipi...

「おっと、電話か…相棒からとは珍しいな」

電話のディスプレイには岩切 猛の文字が表示されていた。

「もしもし、お前からとは珍しいな」

「まあな、ところでお前どこにいるんだ？」

猛はなにやらあわてた様子で早口で聞いてきた。一体どうしたのか？

「実はグランドキングホテルにいるんだ」「なんだって、お前そこにいるのか！」「…まあ落ち着けて、確かにお前には仕事で行くって言うてなかったけどそんなに怒るなよ」

すると相棒もわかってくれたらしく少し落ち着いた声で言うてきた。

「……仕事…か。…だったら相棒、助けはいるか？」

助け…ずいぶんおかしいことを言う。なぜアルバイトに助けが必要なのか…

…ああ、わかった。あまり知られていないが実は猛は知る人ぞ知る美食家なのだ。

もちろんグランドキングホテルの料理も彼が一度は食べたいものの

うちのひとつなのだろう。

考えてみれば俺と一緒にホテルにすればこの料理を食べられるかもしれないと考えるのは当然だろう。

ここは超一流ホテルだ。つまりそれほどの料理がここには並べられる。先ほどのホールには肉がメインとなっていたが、本来このホテルは日本にあるということもあり魚料理が有名なのである。

俺は相棒の気持ちを汲み取ることにした。

「…きてくれ。それとシーフード料理がここにはたくさんあるぞ」

途中、雑音が混じってしまったがきつと喜んでいることだろう。

「わかった！すぐにいく！」

ブツン…

切れてしまったようだ。まあそれほどこの料理を食べたいのだろう。彼の食に対する情熱はすごいからな。

第12話

『w o r n i n g w o r n i n g w o r n i n g……』

日本諜報組織 J I O (J a p a n I n t e l l i g e n c e
O r g a n i z a t i o n) から日本政府防衛特殊捜査機関特殊第
四部隊へ緊急通達

大手セキュリティ会社セーフティー不正行為でJ I O 捜査対象であ
る川田 洋一がプラスチック爆弾C - 4を大量に入手していること
がわかった

J I O は捜査対象確保のため協力要請

よってこれより日本政府防衛特殊捜査機関特殊第四部隊は川田 洋
一の監視及び対象は危険物を所持しているため必要とあらば治安維
持のため対象の暗殺を許可する

また、J I O が捜査対象を捕まえる間、特殊防衛L e v e l 2 に引
き上げる

繰り返す 日本諜報組織 J I O (J a p a n I n t e l l i g
e n c e O r g a n i z a t i o n) から日本政府防衛特殊捜査
機関特殊第四部隊へ緊急通達………』

………

「とうとう川田を捕まえられるか…長かったなあ…」

ＪＩＯ川田不正事件^{リーダー}班長の佐藤^{サトウ} 良樹^{ヨシキ}は約三年間もの間、全く尻尾をつかめなかった川田の不正をとつとつつかんだのだ。

「嬉しそうですね」

「ああ、君は…岩切君か。君は防衛機関第四隊のホープらしいね。頼りにしているよ」

「まだまだですよ…僕なんかよりもすごい人はいますから」

「そうか……すまない電話だ…」

そして電話から聞こえたのは如月という声だった。

まさかと思いあわてて相棒に電話する

なぜいるんだ？という疑問にかられる

だけでもしかしたら相棒は全て知っているのかもしれない

pipipi…

「もしもし、お前からとは珍しいな」

相棒の落ち着いた声が聞こえてきた

「まあな、ところでお前どこにいるんだ？」

「実はグランドキングホテルにいるんだ」なんだって、お前そこに

いるのか！」…まあ落ち着けて、確かにお前には仕事で行くって
言っただけだけどそんなに怒るなよ」

やっぱり相棒はそこに居るのか…相棒が居る理由…仕事かな

「…仕事…か。…だったら相棒、助けはいるか？」

こっちも仕事があるが、せめて相棒のため少しは助けになりたい

「…きてくれ。それとシーフ ザアー がここに ザアー たくさ
んあるぞ」

こんなときに電波が悪くなるとは…

それにC - 4だと！

「わかった！すぐにいく！」

はやく佐藤^{リーダー}班長に連絡しなければ……

第13話

私は全てを終わらすボタンを押す

このホテルは赤い炎に包まれ倒壊する……はずだった

「馬鹿な！ありえん！なぜ爆発しない」

彼が持っていたボタンはあらかじめこのホテルの隙間・セキュリティホール・にしかけておいた爆弾につながっていた。

しかしそれら全ては事前に川田がc-4を持ってるという情報をつかんだJIOと如月晃からの連絡を受け早急に爆弾搜索を始めた日本政府防衛特殊捜査機関特殊第四部隊により全て無事に回収されていたのだ。

.....

ボタンを押す20分前

「佐藤隊長！」

大声を上げて入ってきたのは岩切 猛

いつもよりもあわてているように見える

「どうしたんだ？そんなあわてて」

「たいへんです。あのグランドキングホテルに川田が爆弾をしかけたらしいです」

「なんだと！」

「……わかった。今すぐグランドキングホテルに向かい、まずは爆弾の処理を行う！」

そうして彼らはホテル内部へと入っていった。

・・・・・・・・・・・・・・・・

ホテルの内部を確認し、爆弾を設置しそうな場所をピックアップしていく

このホテルは耐震設計ももちろんのこと、防御面も高い

今回の作戦はそこを逆に考えて、もし爆弾を設置するならどこがいかに割り出していく

やはりセキュリティが高いのでその分穴というのがわかりやすいのだ

「ここだな」

隊長が示したのは窓のまわりの壁だ

このホテルの窓は太陽の光を取り込みやすくするため窓の大きさは

でかい

だが、その分、壁よりも窓周辺の強度は落ちるのだ

「よし、場所も特定できたことだし、これから爆弾回収を開始する。総員行くぞ！」

隊長の言葉とともに俺らが行動を開始する

「……隊長！発見しましたA3地点です！」

隊員からの連絡により皆その場所へ集まる

そこには窓の脇の壁に注意してみないとわからない小さな傷がありそこから爆弾が確認されたのだ

発見したが、あまりもたもたしていて、いつ川田が爆弾を爆発させるかわからない

爆弾処理専門の係りは慎重に、かつ迅速に対応していく

「爆弾回収成功しました！」

その合図により場は安堵の空気につつまれる

「はあ、終わりましたね隊長」

「いや、まだまだ…川田を捕まえないでは」

そうだった、まだ元凶となってる川田を捕まえていない

早く捕まえなければ……

第14話

如月晃は現在迷ってます

「あれ？どこだここ？」

俺は確か相棒に電話した後、ちょうど近くを通り掛かっていた掃除のおばさんにアルバイトである事情を話し、掃除に向かったはずだ

掃除場所は一番上の階の客室前の廊下だったのだが…

ここ違うよね？

だって明らか客室前の廊下じゃないよ！暗いし

でも掃除しないことには始まらないしなあ

おっと、誰かがあっちから走ってきたぞ

ちよつと場所聞か…

・・・・・・・・・・・・・・・・

はあはあはあ

絶対逃げ切つてやる！

結局爆弾は爆発しなかった…川田が何かしたのか？

ふざけるな！だ

つかまる前に逃げてそして川田を殺す！そもそもあいつのせいで汚職が見つかり、そして今の状態になったんだ…

ん？誰だあいつは！？ここは通行禁止のはずだぞ

そこには本来、掃除の職員が通ることはできないはずだが掃除帽をかぶりこの道を掃除している青年がいた

まさか私を捕まえに来たのか？いや、まだわからない

ここは慎重に行かなければ…

まずは話を聞いてみるか…いざとなればあいつをこのナイフで殺してでもいかなとな

掃除の職員一人ぐらいいなくなっても平気だろ！

.....

まずは軽く警告

「おい！ここは掃除禁止のはずだが？」

「いや、ちょっと道に迷っちゃいまして…」

「…そうか、道はあっちだからな」

やはりただの掃除の職員らしいな…

「ありがとうございます」

そういつて青年は道を引き返す……と思ったら

「…そういえばあなたの名前はなんですか？」

「私か？私は…」

そこで気づいた…普通道に迷ったっていうのか？掃除職員が道を間違えるはずがない

それに青年はなぜ名前を聞く必要がある？

青年の目は薄く光っていて口はつりあがっているように見えた

こいつは……敵か！

ズボンの後ろのポケットからナイフを取り出し…あいつに近づき…刺す……！！

しかし、相手はそれを予想していたのか、するりと避ける

くそっ！まさかこんなところまで…

………

やっと見つけた人はあせった様子でこちらに向かってきた

「おい！ここは掃除禁止のはずだが？」

えっそうだったんですか？やべっ全くわかんなかった

「いや、ちょっと道に迷っちゃいまして…」

ってか広すぎでしょこのホテル

「…そうか、道はあっちだからな」

ホント高校にもなって迷子って恥ずかしい

「ありがとうございます」

そういつて引き返そうと思ったがよく考えたらお礼ひとつしないってよくないよな

まずは名前を聞かないと

「…そういえばあなたの名前はなんですか？」

「私か？私は…」

あれ？なんか立ちくらみが

ちょっと気持ち悪いかも…

第15話（前書き）

あけましておめでとございます

正月なので投稿が遅れました

以後気をつけます

次回の更新はまだいろいろと忙しいので一週間くらいかかるかもしれません
が今後ともよろしく願います

第15話

相棒が俺に爆弾の話をしたことにより早期解決できたが肝心の川田がまだ見つからない

だが川田が見つかりつかまるのも時間の問題だろう

このホテル周辺は完璧に包囲し、逃亡することは不可能だろう

だがこのホテルに爆弾を仕掛けもう打つ手のない川田の心情を考えると自爆という方法も考えられるので気は抜けない

「考えられる川田の場所はここです！」

JEOの職員が示したのは、ホテル最上階の客室横の関係者のみ入れる部屋だ

残す搜索場所はここのみだ！

・・・・・・・・・・・・・・・・

隊長^{リーダー}とともに目的の場所へと向かう

今回の川田確保メンバーは隊長^{リーダー}と俺の二人のみでほかの隊員は周辺警備に当たってる

しかし俺の相棒はどうしたのか？まさか川田のもとに……？

・・・・・・・・・・・・・・・・

隊員の岩切と共に川田確保へと向かう

すると何か物音がする

まさか川田が逃げる準備をしてるのか？いや、違う！これは…誰かと戦ってる！！

一体誰なんだ？それでも川田は剣道三段を持っているんだぞ！

壁からそつと覗くと…戦っていたのは岩切と同じぐらいの少年だった

しかし岩切はそれを驚愕の表情で見つめていた

…まさか…あれが岩切が言っていた如月という少年か！

一見すると川田がおして如月晃が劣勢になつてるように見えるが川田の持つナイフを紙一重というところかわし自分の間合いに誘っている

それはあまりにも巧妙で…とても自然で…とても危険だ

予備動作無く自然に相手の攻撃をよける…

はたから見るとそれはあまりにも恐ろしい…それは自分に向けられたら絶対にかわせないものであり、彼がもし避けられなかったら死んでしまうといった自分の死を恐れないことに対する恐怖

一体どれほどの死合いをつんだのだろうか？

彼の体格はお世辞にも良いとはいえない

だが、彼の戦闘センス - 先を見通すというのか？ 観察力、洞察力が高いというのか？ - それはもはや技というより才能

あれには勝てる気も起こらない

当たると思った必中の攻撃がかわされるのは精神的にもくるものがあるのだ

やはり川田も最初は一発で終わると思っていた攻撃がはずされ焦りの顔を生む

一方、如月晃は顔の様子を変えることなく淡々と攻撃を避けていく - それはまるで絶対の攻撃を放つ前の獲物をしとめる攻撃のオーラが見える

「うツツツ……」

勝負は終わった…一瞬の如月晃による手刀

相手の必中と思われた体を縦に割こうとする攻撃が体を一瞬止めていた如月晃に迫る

だが体をひねり必要最小限の動きから遠心力を使った手刀で首をたたきあつという間に勝負はついた

これが如月晃の力か……

第16話

気がつく^{タケル}と相棒が目の前に居た

つてか…顔近ッ！

危ない危ない…

………ん？結局どうしたんだっけ俺？なんか頭が痛くて…くらくらして…気がつく…目の前に相棒と、誰だったか？関係者しか入ってはいけないと怒ってた人が倒れている…と……？

ん…さっぱりわからん！

……………

相棒^{コウ}のすごさは前から知っていた

別に川田を倒したことがすごいんじゃない

その倒し方がすごいのだ

川田を倒すのなら俺でも余裕である

必要最小限の動き、無駄な力がない攻撃、戦略の立て方……

さすがだな！相棒！

相棒に近づく・相棒は壁に寄りかかっている

相棒は川田を捕まえてもほかからの襲撃がないか気配を探っている

のだろう

目を閉じ、壁を背とし…俺も見習わなくては…

相棒の目の前に行くと相棒の目がずっと開く

「終わったな…」

「ああ」

短い会話だが俺と相棒の間ではこれで十分

一件落着、帰りますか！

・・・・・・・・・・・・・・・・

どうやら仕事が終わったらしい

相棒がアルバイト終わりのお知らせを聞かせてくれた

たぶん俺の仕事の悪さに浅田さんは失望したのだろう

何が終わりか相棒は言わなかったが、俺と相棒の付き合いは長く、目を見れば大体のことはわかる

そして相棒はそんな俺の落ち込み具合をみてか、それを払拭するかのように、一件落着だし帰ろうぜ！と誘ってくれた

まったく、本当に俺の相棒は気のきくやつだ！

相棒のやさしさがうれしいよ

.....

p i p i p i
レッドパーソナルデータ 危険人物表の更新をします

名前...キサラギ如月 コウ晃

性別...男

生年月日...1989・10・22

国籍...日本（J A P A N）

危険度...L e v e l 2

備考...組織幹部であり日本での活動をしていた川田 洋一が如月 晃、J I O、日本政府防衛特殊捜査機関特殊第四部隊により逮捕された。主に如月 晃の動きにより川田 洋一が捕縛された模様。友好関係に日本政府防衛特殊捜査機関特殊第四部隊に所属する岩切 猛がいる。ここから川田 洋一が捕まえるきっかけとなったとされる。また日本にいる調査官によると如月 晃は「流星のカイト」を退けたとされる。知略、武力、ともに秀でている模様。更なる情報を求める。

第16話（後書き）

きりがよいので今までの文章を見直します

加筆修正を加えていきますのでまた更新は一週間後くらいになりそうです

よろしくお願いします

第17話

表と裏の関係、それは全てに対して言える

例えば、硬貨の表と裏、幸せと不幸の関係、表裏のある人間

もちろんそれは世界にもいえる

表の世界 - いわゆる日々平和に過ごせる一般人の世界

裏の世界 - 闇にまぎれた世界、殺人なんか当たり前、国を裏から操るなど…

そしてその裏の中でも300年以上前から続く組織「オブスキュライト・モンディアル世界の闇」
と呼ばれるものが牛耳っている

その組織に目を付けられたら死あるのみといわれているほどだ

組織には危険人物表と呼ばれるものがあり、そこに書かれている人物は組織に対して危険かどうか、この世から消すかどうかが詳細に記されている

Level1～Level3まで、Level3は抹殺対象に指定される

.....

「ケリー、日本支部の幹部の川田が捕まったそうだよ」

「まああいつは所詮そんなものだろう」

二人の男が話をしている

一人は白人男性で眼鏡をかけていて髪が目隠すぐらいまで伸びている

そして数十台ものパソコンをものすごい速さでうつっている

彼は「世界の闇」オプスキュライト・モンディア所属の極めし五人の一人、イーテン

もう一人は黒人男性でサングラスに坊主、そしてタバコをふかす男

「世界の闇」オプスキュライト・モンディア所属の極めし五人の一人、ケリー

彼らは日本に拠点を置いていた「世界の闇」オプスキュライト・モンディアの日本支部の幹部であった川田が捕まったことについて話をしていた

「第一、あいつはセーフティーの金を横領したので捕まったんだろ
ダサすぎるだろ

それにC-4も持っていたのに…馬鹿じゃないか？」

「ケリー、僕もそう思うよ、けどもともと彼は幹部であって幹部じゃないみたいな感じだったんだけどね…もともと日本支部も、ものものときにあいつを駒にするつもりだったらしいし」

「なるほどね、それならしかたないな」

「だけど…ひとつだけ気になることがあるんだよね」

「ん？なんだ」

「如月 晃、彼があいつを捕まえたらしいよ、これを見て」

「危険人物表？…なんだこいつは？初期手配でLevel2だと？
レッドパーソナルデータ
何かの間違いじゃないか？」

初期手配でLevel2というのは珍しく、ケリーの興味を誘った

「僕もそう思って調べただけどね…彼の情報が良くわからないんだ」

「情報おまえを極めし者か？」

ケリーの顔が驚愕の表情になる

「僕もこれからもう一度調べるつもりだから」

「じゃあ俺はお邪魔だな」

如月 晃、なかなかおもしろそうなやつじゃないか…

ケリーは薄く笑いながら部屋を後にした

第18話

さて、如月 晃ね

タイプ
潜る！！

オフスキュライト・モンディア 「世界の闇」所属の極めし五人の一人、イーテンの極めたものは情報インフォメーション

つまり現代においてもっとも重要視される武器を極めているということ

彼が何かを調べるときには部屋にこもり、彼の部屋に設置されている数十台もののパソコンで世界のありとあらゆるところに侵入するハッキング

だんだんと彼の意識が回りからパソコンへ

― 現実世界から電腦世界へ侵入…そして彼は潜タイプするっていく

オフスキュライト・モンディア 世界の闇本部からアメリカ、日本、中国、イギリス、ロシア、韓国…ありとあらゆるところへ潜タイプっていく

…見つけた

場所は…日本

もっと細かく！もっと正確に！

日本政府防衛特殊捜査機関！

………

…

おかしい…

前にも如月晃を調べたのだが、普通なら裏の者であれば何かしらの情報がでるのだが彼から出るの是一般人のような情報だけ

だからケリーにも彼のことがよくわからないと言ったのだ

もしかして…彼は本当に一般人なのか？

これは早急に調べる必要があるそうだ

ケリーとそうだんするかな

・・・・・・・・・・・・・・・・

ケリーは思う

如月晃は本当に一般人なのかと

イーテンから彼はもしかしたら一般人なのかも知れないと聞いた

だが…はたして一般人、表の世界で生きる者が川田を鮮やかな手段で倒せるのだろうか

裏でもそれなりに名の通った「流星のカイト」を倒せるのか

はつきり言うと、ケリーはイーテンが言っていたことを信じていないのだ

確かにイーテンの情報収集能力はすごいと思うが、それはあくまで情報、自分の目で見たわけではないのだ

ケリーは自分の目でしか信じない男なのだ

しかも武術に通じるケリーはそんなまぐれで倒せたらカイトは達人マスタークラスなどではない

だが、ケリーはカイトの腕を知っている

カイトの射撃能力はあきらかに達人マスタークラスなのだから

故にケリーは如月晃にアクションをする

まずはそれなりにできる部下を彼のもとに…

それで倒れたら、如月晃はそこまでの人物、倒れなかったら本物だ

ケリーの勘では如月 晃が勝つとささやいている

さあ一体どうなるのかなあ

せいぜい俺の期待を裏切るなよ、如月 晃

第19話

今日の如月晃は浮かれている

授業中にはずっと外を眺めていて、ご飯を食べているとき、箸から卵焼きがポロリと落ち、とにかくいつもと様子が違う

そんな晃を心配する相棒の猛

（いったいどうしたんだよ晃は？この前の事件は解決したはずだぞ… 一体何を悩んでいるんだ？くそう、俺が晃の相棒なのに…）

猛はかなり深刻になやんでいるのだが実は晃、ただたんに眠かっただけなのだ

外を見るのは太陽の日差しを顔にあてて気持ちいから、卵焼きを落としたのも意識が散漫になっているからだ

だが、彼はあくびをしない（しても目立たないようにやる）ので結果として相棒タケルから勘違いされてしまったのだ

そんなこともあり学校から帰るのに猛も一緒に帰るといいだす

「相棒、今日は一緒に帰ろうぜ！ちょっとショッピングモールに行こう！」

「…ああ」

・・・・・・・・・・・・・・・・

さすがだな

あの如月晃という者、ただ者ではない

俺がみつちりと仕込んできた部下5人にあいつを監視させてみたが…

あいつ、全部気づいていたとはな…

こちらがあいつを遠く―それも双眼鏡を使つての視認だったのにもかかわらずあいつは窓からこちらに目を向けてすぐに攻撃範囲から机の上に寝そべるような形をして逃れたとは…

ふむ、今回の獲物は楽しませてもらえそうじゃないか！

・・・・・・・・・・・・・・・・

ショッピングモールの本屋に向かう

今日は新しい漫画の発売日！

昨日の夜の徹夜状態も学校で回復し、絶好調となってきた

正直、テンション高すぎかも

猛とともに本の品切れが出る前に本屋へ急いで行きたいので通路に人ごみがいるにもかかわらず走っていった

だが、それが悪かったのだ…

やはり、急ぎすぎたのだろう

晃は人ごみを通過する際、バッグを人にぶつけてしまった…

結果、見事に当たった人はその場に倒れこんでしまった

やはりバッグの中に鉄アレイを入れていたのが悪かったのか

朝、学校来るときにいつもより重いと感じ、それが寝不足のせいだ
思っていたのだが学校に来て開けてみたらビックリ！なんと奥底
に一キロの鉄アレイが…

そして、倒れた者の姿を見た猛は目を丸くして驚き、そしていきな
り難しい顔をして倒れた人を見ていた

「晃、お前は…いや、なんでもない、お手柄だったな」

なんのことだかよくわからなかったがなんか俺はいいことをしたら
しい

そして、猛はちょっとこいつを連れて行くといってどっかに行つて
しまった

ん？ どういう状況！？

第20話

しかし、驚いた

まさかこんなところで指名手配犯の武藤 忠志タダシがいたとは…

・・・・・・・・・・・・・・・・

晃と一緒に近くのショッピングモールに向かう

すると晃はいきなり何かを指指して走り出した

一体どうしたのか… 晃がこういった風になったときは何かしらのことを起こす

晃は人ごみの中、すべるように移動していく

そして、予備動作無く一人の男に晃の持つバッグをぶつける

走ってきた力とバックの重みが男の体にクリティカルヒットした

男は何も言わず沈み込んだ

俺は倒れた男をしてみる

ッッ！

まさか…こいつは武藤 忠志だタダシと！

こいつは音もさせずに相手の背後に回り、相手の声を出すことなく闇に葬ってきた指名手配犯の一人

まさかこんなところにいたとは…

いや？なぜこんなところにいるんだ？

ターゲットが近くにいた？

…まさか…

晃がターゲットだったのか？

それなら説明がつく

いきなり駆け出した晃はきつとこいつの気配をつかみ人ごみをすばやく動くことにより相手からの意識をそらせた一瞬に武藤の真横に接近

そして晃は相手に声を出させることなく、晃の得意とする予備動作無しの攻撃が相手に命中…

まさかのことだっただろうな

自分の得意としていたであろうサイレント・キラー気配殺しの殺人が全く同じようにかえされ、沈められたのだからな

だが…一体どうして晃が狙われたのだろうか

なにか背後に大きな組織がからんでいるのか？

……考えるのは後だ、今はこいつを縛り上げないとな

晃は何か知っているのかな？まあ今はお礼だけ言っとくか

「晃、お手柄だったな」

.....

「まさか、ああも簡単に倒されるとはな……」

正直、あの少年―如月 晃のことを侮っていたかもしれない

武藤はサイレント・キラ配殺しの殺人だけは超一流とっていい暗殺者だった

今まで、各国の防衛組織の者ですらこいつの気配は捕まえられず、いつも後手だったのにもかかわらずあの少年―如月 晃はそれすら見つけ、あまつさえ全く同じように自分の気配をまわりに溶け込ませ、その一瞬をついた倒し方は目を見張るものがある

これは少し認識を改めなければ……

しかし……これはこれでもおもしろいではないか！

如月晃を遠くから見つめていた男は笑いを抑えきれずにそれはそれは楽しそうに笑うのであった

第21話

pipipi

「もしもし班長、リーダーこちら猛です」

「ん、なんだ猛か？どうした、そんなあわてて」

班長はすぐに電話に出て、のんびりと答える

「実は…武藤を捕まえました」

「…どういうことだ？説明しろ」

急に班長はまじめな声になり静かに聞いた

猛はあらかたの説明をした

「…ふむ…実は武藤はある組織に属していたらしい…それは世界でもっとも巨大で闇を抱えている組織」

オフキウスライト・モンディアル
「まさか…世界の闇！！！」

どういうことなのだろうか？

オフキウスライト・モンディアル
世界の闇といえは世界でもっとも恐ろしいとされている組織であり、
実質、裏から世界を支配しているとさえ言われている

オフキウスライト・モンディアル
あのアメリカでさえ世界の闇に支配されかかっているという噂もある

しかし晃がこの組織に狙われる理由は何なのだろうか？

.....

キーボードの音がリズムミカルなステップを踏みながら部屋に鳴り響く

「東の魔女」はJIOに^{ハッキング}潜入する

JIOの機密levelは日本トップであり、^{ハッキング}潜入するのは無謀と
しか思えない

だが、それは「東の魔女」

情報においては達人^{マスタークラス}の実力を発揮し最深部へと進んでいく

なぜこんなことをハイリスクを犯してまで^{ハッキング}潜入するのか？

彼女は誇りがある

それは情報においては世界トップであるということ

彼女は前に「流星のカイト」に情報クラスlevel5は探れない
のかと…

彼女は答えた、無理だ！と

しかし、本当にそうなのか？いや、それでいいのか？

彼女はついついカイトにはそう答えてしまったが心のうちでは否定
していた

だから彼女は挑む

彼女の今までの経験と誇りをかけて…

・・・・・・・・・・・・・・・・

ふふッ、やってるね

小さな声が口から漏れる

彼がいるのは回りを数十台のパソコンに囲まれた部屋

そこに彼、イーテンはいた

画面に映るのは一人の女性

その女性は同じくキーボードを一心不乱にたたきながらJEOにハッキングを仕掛けている

彼女は全く気づいていなかった

その場所が彼に監視されているとは…

彼女は全く気づいていなかった

彼女が囹にされてしまっていることを

彼女は全く気づいていなかった

彼女が情報level5の最深部まで進入できたのは彼の手助けがあったことを

彼女は全く気づいていなかった

全て仕組まれていたことを…

彼女は全く気づいていなかった…

第22話

- ACCESS -

- PASSWORD -

- DATA -

011010010100110001010101…

全てのデータが魔女からイーテンの手元に流れてくる

それを見てイーテンはうつすらと唇の端を吊り上げる

あぁなんと滑稽な姿だろうか

魔女は必死になり情報を集め、そして右から左へと僕に流してくれる

「ん、そろそろかな」

そして魔女が情報をあらかた集めた

「ファミリー、居るんだろ？」

ファミリー…ファイブ・マスター極めし五人の一人、極めたものは暗殺、アサシンマスター暗殺極めし者である

この『ファミリー』、実はほかの極めし者とは少し違う

この説明には世界の闇の構造を知らなければならない

オフスキュライト・モンディア
『世界の闇』は極めし五人をもとにして構成されている

それぞれ支配、情報、制御、武力、暗殺である

主に、「支配」が世界の闇を運営し、ここが実質的TOPである
オフスキュライト・モンディア

そして「情報」が世界全体の情報を常に持ち続け、全てを知る

「制御」は政治制御から情報制御、機械制御など世界の闇を古来から
オプスキュライト・モンディア
存続させるために不可欠な「表世界」との調和を目指す

「武力」は純粹な力、この場合、人間一人ひとりの実力がとても高
マスタークラス
く主に達人と呼ばれるものたちで構成される

逆に「暗殺」は主に始末である

暗殺は武力と違い、ひたすら気配遮断をし、静かに相手を消し去る

全く「武」とは関係なく、もはや正反対の関係である

暗殺部隊の面々には名前が無く、暗殺部隊のものは皆、アサシンを
名乗る

もちろんそれぞれがコードを持っているがそれは主にトップが管理
していて指示をだす

そのトップこそコードネーム「ファミリー」

その「ファミリー」に情報極めし者^{イテン}は魔女の抹殺を頼む

ファミリーはひとつ小さくうなずくと静かに闇に紛れ去った

.....

魔女は何が起きたのかわからなかった

突如、安全圏だったにもかかわらずハッキングが探知されてしまった

「なんだい！これは」

突如画面に映った緊急信号”emergency”

今まで得ていたデータが全て流れていつてしまう

ああああああ
...

わずか数十秒で全てが失われ、電源が切れるパソコン

そして突然のめまいが起こり、彼女が最後に見たのは黒い人影

今、彼女「東の魔女」の全てが失われた

第23話

晃は猛は用事があるといってショッピングモールから出て行ったため一人でぶらぶらとしていた

ほしいものが手に入り満足そうな顔をしてぶらぶらと歩く

しかし、めばしいものも無く、早くこの漫画を読みたくて家へ早急に帰ろうと思った

電車は混んでいて家も近いので歩いてかえることにする

さらに小道を使うと早く帰れる

だが晃は実は怖がりなのだ

夕方で小道は暗くあまり晃は使いたくない

だから自分を鼓舞するため、ふと漫画に出てきたキャラのセリフを口ずさんだ

「やれるものならやってみる！」

かつこよく決めた…と晃は思うがこんなことを言わないと駄目なくらいヘタレな自分にむなしさがでてきてしまいへこむ

さて、帰るかと思いい顔を上げるとそこには黒い服を着た男が…

一体いつきたのだろうか

まるで最初からそこにいたかのように思えてならない

そう感じて首をひねりながら考える

だが、そんなことは些細なこと

すぐに家に帰るために路地を歩いた

.....

ケリーは思った

如月 晃はどうやら漫画を買ったあと家へ帰るのだろうと…

彼はショッピングモールを出て行った

だが、なぜ彼は電車を使わないのか？

俺は一応如月晃の人物情報パーソナルデータは確認している

俺が思う限り、絶対に電車を使うのがいいのだが？

なんだこれは？誘われているのか？

しかし如月 晃はそんなことに気づいた様子なくショッピングモールから出て行った

ふむ、まあ罠でもかまわない

とにかく追ってみる

一体どういう反応をするのかな？

.....

如月晃を追跡しているといきなり路地に入ったところで立ち止まった

今、俺の気配はただ気配を消すのではなく回りの空気となじませている

そのため、たとえ俺の姿が見える位置にいても、よほど注意深く見なければわからないのだろう

だが如月晃はすぐにその場に立ち止まり、俺のほうを向いた

「やれるものならやってみろ！」

ほう、ここまで気配を希薄にし周囲と同化させても気づくか

こいつの気配察知能力は半端ないな

すぐに気配を溶け込ませるのが無駄だと思い、気配をあらわす

そして、手始めに近くに落ちていた石を高速で投げる

石はまっすぐ如月晃に向かっていき……かわされた

石が当たったと思った瞬間、頭を数度傾け石を紙一重で避けたのだ

今、ここに如月晃とケリーの戦いが始まったのだ

第24話（前書き）

今回、実はいつものように8日の0時に予約していたのですが予約ミスをしていたことに気づきました。

ほんとすみませんm(_ _)m

ちなみに地震の影響がこちらにもあったため次回の投稿が遅れるかもしれません。

ご迷惑おかけします。

第24話

漆黒の服を着ている男、ケリーは気を抜くことなく相手、晃を見つめる

晃は自然体であり、いつでも対応できるような防御の姿勢である

ケリーは体を前方に倒しつつも足元に力をかけ、いつでも攻撃できるようにした

もう勝負は始まっているのだ

お互いの小さな行動一つ一つが相手の行動を抑えるように双方とも構える

如月晃というやつはカウンターが得意なのだろう

ケリーが晃の姿をみると、一見防御体制と見えながらも、反撃をするために姿勢を低くしていることがわかる

——風が吹き、落ち葉が舞った——

その瞬間、ケリーは足にためていた力を解放した

特殊歩法——滑即歩行——
カッソクホコウ

地面をすべるように体制を保ちながら地面すれすれを走り限りなく摩擦を少なくし、なおかつ最も力を最小限にして遠くまで足を運ぶ

この歩法で5メートル近くの彼らの間合いは一瞬で詰められた

如月晃に驚きが見てとれた

回りから見れば、先ほどまで離れていた男がいきなり如月晃の目の前に現れてまるで瞬間移動のようだと思う人もいただろう

そしてケリーはその力のまま掌底を繰り出す

それは見事に如月晃の腹の中に吸い込まれた

そのまま晃は数メートル吹き飛ぶ

だが…なんと如月晃は打たれる寸前に体を後ろに飛び衝撃を逃したのだ

一般人が見ればケリーに吹き飛ばされた如月晃と思うかもしれないが、実際には如月晃はうまく空中で衝撃を逃がすことによりほとんどダメージを受けていないのだ

ケリーは思わず舌打ちをしてしまう

詰めが甘かったか…

しかし…楽しい！

こんなにもわくわくさせてくれる相手は久しぶりかもしれない

ケリーの口元がつりあがるも目は鋭く相手の動きを見つめている

突如、空中から石が降り注ぐ

よく道にある小さな石だがついそちらのほうに意識を向けてしまう

——しまった！——

如月晃はもう目の前に来ていた

あまりにも低空姿勢のままこちらにきていたので反応が遅れる

そして低空姿勢のまま如月晃は手を前に突き出し、ケリーの足にそえられる

……

合気の攻撃だろうか……

足で蹴り上げようとしたところそのまま如月晃の手が俺の攻撃をそらしつつ、真上にはじいた

つつつつ！

体が上空に浮き上がる

そのまま如月晃は残っていた左手をあごにあて空中で俺を回転させた
それだけでは終わらず頭突きで地面にたたき落とされる

何とか受身を取り離脱する

体をひねりながら両手で地面を瞬間的にはじくことにより衝撃を地面に逃すも、やはりダメージは残る

すばやく如月晃と間合いを取る

さて、今度はこちらから行かせてもらおうか…

第25話

帰ろうと思いい路地を歩き出そうとすると黒服の男性が立っていた

その風貌はやくざのようにも見える

晃はこの道を選んでしまったことを後悔した

非力なただの学生である自分は、やくざの前を通る勇気が出ない

そのためその場に立ち止まってしまっ

それがいけなかったのだろうか？

空気が変わった

というか威圧感みたいなものが黒服の男からするんですけど…

やばい…絶対目つけられた

こうなったら…逃げろ！！

とりあえず少しずつ後ろに足を運んでいく

それがばれたのだろう

男の目が一瞬鋭く光ったと思うと目の前に現れた

驚きと恐ろしさで腰が曲がる

と、同時に車に吹き飛ばされたかのように腹に衝撃が伝わる

そのまま空を俺は飛んだ

そこで俺の意識は無くなった

・・・・・・・・・・・・・・・・

痛みでくらくらする

気がつくと自分は地面に顔からぶつかりそうになっていた

とにかく姿勢を正そうと足に力を入れる

何かを蹴り上げた感触がした

地面に頭をぶつけないように手を前に出す

すると手に何か当たる

なんだこれは？と思い正面を見ると先ほど見たやくざらしき男が！

驚愕の事実にはじく

自分の体制は整えられたものの、その男はこちらをにらみつけるように見ていた

男と自分の距離はいつの間にかに5メートル程

逃走方法を考える…

ここはお金をだして許してもらえないのか…？

仕方ない、命には代えられないと思い鞆に手を伸ばし財布をとる

しかし実際に出てきたのは学校で使っていたCD…

しかもそれが手からすべりちょうど吹いてきた風に乗って黒服男のほうへ…

しまったああああ！！！！

完璧に喧嘩うつてしまったと思い、そんな事実後ろにむいてダッシュ！

角を曲がりさつさと離脱した

はあなんて疲れた一日であろうか……

・・・・・・・・・・・・・・・・

第二ラウンドと思いや、如月晃は戦線を離脱した

もちろんそれを妨げようと動いたが、自分が動くときよんでいたのだろっ

動く軌道上に如月晃は鞆からCDをとりだした

それをこちらに投げてきたのだ

最初は全く違う方向だったのが、いきなり路地風が吹き軌道を大幅に変えこちらに向かってきたためそちらに意識を一瞬向けてしまった

結果、奴がそんな隙を見逃すはずがなく目の前から消えていた

悔しさを胸に秘めながら足を「オブスキュライト・モンディアル世界の闇」にむけた

第25話（後書き）

長らくお待たせいたしました。活動再開です！

更新速度は今まで通り一週間に一度で行きたいと思います。

また遅れるようなら前書き、ないしは後書きにて報告します。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8468o/>

勘違いされる如月くん

2011年4月5日00時12分発行